

ゴーストライダー

2007(平成19)年2月22日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★



監督・脚本・映画版原案＝マーク・スティーヴン・ジョンソン／出演＝ニコラス・ケイジ／マット・ロング／エヴァ・メンデス／ラクエル・アレッシェー／ピーター・フォンダ／ウェス・ベントリー／サム・エリオット／ドナル・ローグ／ブレット・カレン (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2007年アメリカ映画／110分)

……なぜ今頃、昔むかしのアメコミものが……？ と思うのだが、ニコラス・ケイジは大はしゃぎ……？ ドクロの顔に変身し、炎と共に突き進むライダーというキャラが、なぜそんなに魅力的なの……？ 同じ荒唐無稽なエンタメ作品なら、日本の『どろろ』の方がスピード感があってまだ面白い……？ もっとも、悪魔の登場はキリスト教社会特有のものだし、悪魔との契約がストーリーの根幹となっているところは、法化社会を目指す日本でも大いに参考に……？

なぜ今頃、こんなマーベルものが……？

『デアデビル』(03年)、『ハルク』(03年)、『スパイダーマン』シリーズ、『X-MEN』シリーズなどアメコミものはたくさん映画化されているが、基本的に私はこの手の映画には関心と興味が薄い。したがって、1940年代にオリジナル版がスタートしたという原作コミック『ゴーストライダー』の話は全く知らないし、「70年代にマーベルが著作権を取得した時、スタント・ライダーのジョニー・ブレイズを主人公とする超自然ものへと生まれ変わ」ったことも、さらに「90年代には再び主人公が変わり、リニューアルを遂げている」ことも全然知らない。さらにこの映画に主演したニコラス・ケイジがハリウッドきってのコミック通であることも知らなかったし、何よりもゴーストライダーの顔がドクロになるうえ、その彼も、そして彼が乗るヘルバイクというバイクも炎に包まれていることも全く

知らなかったもの。

そんなマーベルものが2007年の今日本で公開されるのはなぜ……？ そしてこの映画を観たことによって、なるほどゴーストライダーとはこういうキャラで、こういう物語だったのかということにはわかったが、だから一体ナニ……？

悪魔との「契約」も立派な契約……？

この映画には、ヘンリー・フォンダを父に、ジェーン・フォンダを姉に持つ1940年生まれのピーター・フォンダが悪魔メフィスト役で登場する。メフィストは悪の支配者としての地位を不動のものとするため、父親のバートン・ブレイズ（ブレット・カレン）と共にスタント・ライダーをやっている若き日のジョニー・ブレイズ（マット・ロング）にゴーストライダーとなる力を与えるのだが、そのエサとしたのがガン患っている父親の病気を一夜で治してやるということ。そのエサの対価として、ジョニーがメフィストに売り渡したのは、自らの魂だった。

たしかに、バートンのガンは一夜にして治癒したが、翌日スタントショーに出演したバートンは不慮の事故死を……。「俺を騙したな！」とジョニーはメフィストに迫るが、法的にはメフィストには何らの契約違反はなし……？ 「お前が必要になった時にまた現れる」と言い残してメフィストはジョニーの前を去っていったが、さてそんなメフィストとジョニーとの契約は有効……？

今、大きく成長したジョニー（ニコラス・ケイジ）は、親友のマック（ドナルド・ローグ）と共にスタントショーを展開していたが、ジョニーは今やバイクで90メートルを飛んでいくという離れ業を演じていた。そして激しく転倒してもケガ1つしないという不死身のスタントを誇り、観客からの拍手喝采を浴びていた。ところで、彼がそんな芸当ができるのは、やはりメフィストが契約をきちんと履行しているから……？ すると、契約どおりメフィストのためにジョニーが必要とされるのは、一体いつ、何のため……？

法科大学院が誕生して「法化社会」が叫ばれ、さらに法令遵守とコンプライアンスの文字が日々新聞紙面を賑わせている今の日本では、悪魔との契約でさえ守られるのが当然だとする、このアメリカ型の契約は、大いに参考に……？

悪魔にも父子の対立が……？

父子の葛藤をテーマとした映画は多いが、この映画にもアメコミらしくちょっと異質の(?)それが登場する。それは、メフィストとその息子ブラックハート(ウェス・ベントリー)との対立と確執。そもそも悪魔がどの世界をどのように支配しているのか、それ自体がよくわからないが、ブラックハートが目指しているのは地上の完全支配。したがって、どうもそのために、いつでもどこでも身を隠せる特殊能力を持ったフロウ、アビゴール、グレジルという3人の部下(?)を連れて、悪魔の世界から地上に舞い降りてきたらしい……。そこでメフィストに必要となったのが、ゴーストライダーの力。つまり、地上(地獄?)を支配しようとする息子ブラックハートの野望をくじくため、炎のドクロのゴーストライダーをこれに立ち向かわせたのがメフィストだ。これは、ジョニーが若かりし日にメフィストと交わした契約にもとづく義務の履行だから、やむをえないもの。しかし、こんな父子の対立と確執が悪魔の世界にもあるなんて……？

恋人役として2人の女優が必要……？

この映画でジョニーの恋人ロクサーヌを演ずるのは、現在のジョニー(ニコラス・ケイジ)に対応するエヴァ・メンデスと、若き日のジョニーに対応するラクエル・アレッシーの2人。エヴァ・メンデスは『最後の恋のはじめ方』(05年)(『シネマルーム7』97頁参照)、『レジェンド・オブ・メキシコ/デスペラード』(03年)(『シネマルーム6』219頁参照)、『タイムリミット』(03年)(『シネマルーム4』101頁参照)等に出演している、私が注目しているラテン系の顔立ちのハッキリした美女。彼女は1974年生まれだから、若き日のロクサーヌを演ずることは容易なはず……。しかるに、なぜマーク・スティーヴン・ジョンソン監督はあえて現在のロクサーヌと若き日のロクサーヌに分けて2人の女優を配置したの……？ それは、さすがに1964年生まれのニコラス・ケイジが20歳前後の若き日のジョニー役をやるのはムリと判断したため……？ つまり、そのとぼっちり(?)を受けて、エヴァ・メンデスは若き日のロクサーヌ役から外され、逆にラクエル・アレッシーは役に恵まれたわけだが、ホントに2人の女優が必要……？

美女のエヴァ・メンデス1人で十分だと、私は思うのだが……？

カーター・スレイドとは……？

原作のファンは当然知っているのだろうが、タイトルすら知らない私には、登場人物たちの属性やキャラを把握するだけで大変。映画の後半に登場する墓守り人のケアテイカー（サム・エリオット）は、一見ショボイ役（？）だが、実はかなりのキーパーソン……？ だって彼は、150年前にいたかつてのゴーストライダー、カーター・スレイドだったのだから……。そんなケアテイカーは、魂を売って悪魔と契約したゴーストライダーはその契約に従って行動するのが運命だとジョニーに説き、自らも最後の力を振り絞って炎の馬にまたがって、ジョニーと共にブラックハートとの対決の地サン・ヴェンガンザに向かったが……？

『どろろ』 vs. 『ゴーストライダー』……？

妻夫木聡と柴咲コウの2人が主演した『どろろ』（06年）は荒唐無稽なエンタテインメント映画だが、人気コンビの出演と強い宣伝力によって、『キネマ旬報』3月上旬号によれば、「今年初の大ヒットのスタートとなった。30億円の大台に乗せる勢い」（163頁参照）と書かれている。さらに、「この作品が途中で失速するようなことがあると、今年の映画の流れが悪くなりそうなので、なんとしても30億円、さらに40億円乗せて勢いをつけてもらいたいものである」（162～163頁参照）とまでも……。この『ゴーストライダー』には、ニコラス・ケイジがベタ惚れで、えらく入れ込んでいるようだが、映画としては実に荒唐無稽でバカバカしいもの……？ バイク好きの人たちや炎いっぱい視覚効果を楽しむ人たちがいるとしても、それは所詮アメコミの世界……。

3月に公開される『ラストキング・オブ・スコットランド』（06年）や『ブラックブック』（06年）などの傑作は地味だから、きっとド派手な『ゴーストライダー』に比べると、興行収入の面ではハンディキャップがあるのだろうが、私の『シネマルーム』ファンの皆さんには、是非『ゴーストライダー』ではなく『ラストキング・オブ・スコットランド』や『ブラックブック』を観てもらいたいの……。

2007(平成19)年2月23日記